

DOTONBORI UTSUYAMA

符号の起り

後
先
づ

左の符号

弗買ひの~~し~~
い~~は~~
~~う~~
て
や
ま
し
い

弗 2 票 徵 九 3. \$

物に
世の
よう。

ヘルリが来た

藤田 五角二用

ナニヤニス

維新

(太平正統)

狸の脇つゝ

學者

芝氣船を為朝

文明
南化

幽靈

ク
口

達磨の足

工口

島
2
上
下
か
ふ
ふ

道と食と礼

伯友叔齊

柳河春三よ、
あなたは自ら
衷心を

はつ、あ、う、

實

新たに
お尋の
研究を
進めて
ゐるた
りであ
る

トモにこそなつて
あふ。

今更

依
12
文
火
上。

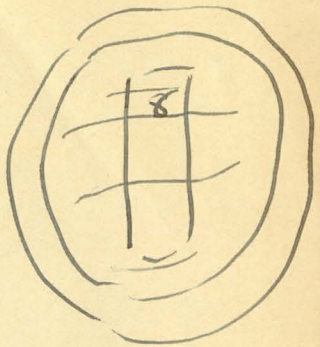
劉五

時

事 實 概 括
 概 括 二 次

否、
その
か。

アメリカの
文化



第一圖

(第一圖) 図に於ける柱は、二本の柱がある。この二本の柱は、

の殖民地に於て廣く用ゐられたスパイン銀柱に

「柱」(Pillar dollar) なるものがあつた。

柱は、ヘルクレスの柱、ゴブアルタル海峡の

両岸の山を表彰するもので、

此のである。

このヘルクレスの柱を巻く旗、\$の形がまた

のである。その説、行はれた。これもあつた。

併し、これら東の出て来たのである。先づ

一は、説があつた。讀者は第一回

の柱の中間に、8の字を認め、であらう。

本は、(Heale) なることを示したのである。

ハレアレとは、ハレアレに

それでは、柱ドルは、ハ

呼ばれた。\$の形は、

(二) 柱の間の8、即ち18の形である。否、

ハ、即ち8R、ハの形である。否、

ハ、即ち8P、ハから

来たのである。ウエブスターの大辞書の

五版(一八六五)なるものは、このP8説を採用して

ある。實際

併し、この尋の説も、その頃の精細な調査によつて、

打破されるに至つた。

一、其分は

この形を助ける

と、吾々も

の形を助ける

とせよ、定

を味するか。

を味するか。

を味するか。

を味するか。

を味するか。

を味するか。

を味するか。

を味するか。

第四回へ、
通り、pesos は

定説となつて居る

第二回

西班牙ドル

の
に
て
あ
る
と
い
う

丁
重
な
金
貨
の
南
米
諸
国
の
獨
立
戦
争
の
時
に
は

一七七五年に、
大。イン。系。の。ア。メ。リ。カ。人。の。商。業。

カリフォルニアの
カリフォルニアの英米

カリフォルニアの
カリフォルニアの英米

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

した書物も
これ、この
後、この
後、この

十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

の
十六世紀
十六世紀
十六世紀

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

獨
立
戦
争
の
時
に
は

No

そゝまで

中 日本近來の著者
の或る人は

支那の支那
書

から伊来し居て

ヨロウハの曆
五文

竹葉通

乙、
~~金林~~西坪

9 数を知ら

な い こ も り な い の

ではあつた

一 羊 解 一

三

]

第三圖

国防 | 日
おろの
在
ゆ
の

9
L
め
ん

二、新政府樹立の爲、

半世紀の間に急進を以て

あつたアメリカ。一八五三年（嘉永六）

は
ポル
う
七南
か
来
た。
封建鎖国の

人人は、^{黒い}馬がさした。
日本の数学は目醒の日が

来たりである。
 彼等の向う一般の輿論は、

和算家天文曆術は支那西域より傳へたる

わが
故郷
に
至つては
我が
神州は
世界に
冠た

も
 う
 で、
 師 ~~外~~ 人
 の ~~底~~ ^底
 な
 め ^お ぶ
 と
 こ
 う
 じ
 な
 い
 と
 し
 て
 居
 た
 う
 で
 あ
 る。

ねん曆を
 放て寛政
 改曆の外
 以来全
 然西暦の
 儲實

天よふを拝用したるの
比すや、
おるは
餘税

事情と異なりしところであつた。長崎へ来てゐる。

おと書と記した人もなく、おととるんだ人

のあゝ事も南かぬのである」(三上平夫氏「東西おろろ」)

當時民衆の教育は、單なる實用本位の、或は

之に遊戯的介子を挿増せし
低次のものであつた

の、
 算の専門家は
 数学のための
 数に

其本
高踏のてあり、主として

後歌し、
 数学を以て「無用の用」
 傲語した

東のよき者
 さああった。
 ああ。
 い

各々一定の流の下の~~あ~~ギルド~~の~~主人公

「数々 おぼ
として
生
七
舌し

所、黒船の馬きである。

今や黒船は和算家をも驚かした。吾々は武装された
應用数学書を見出すのである。一例として

それらから

No.

福田 理軒 總理、花井 使吉 編「海軍集成」

安政三年（一八五六）高島 秋帆の序文を載せて

「方今洋艦（出沒）近き其情不可測（原漢文）

とあり、凡例に「次の如く述べてある。

「艦は防禦砲熧の用に供し、砲を彈指の向に導

ることも専務とす。洋東の軍艦は其熧門

の多少に應じ、其艦の廣狹、櫓の長短、自定

数あり、今世一二を挙て異艦の遠近距離を求

む急卒の種とす。』（第四回）就て語らん

更の中に、著者は和蘭の軍艦を渡り、津に

「又たに記す、父は嘉永六丑六月相州浦へ

入津せし、亞義理加船四艘の内、フレカワト二

艘、又同年七月西肥長崎へ入津せし、魯西亞船

フレカワト及びコルフェット等、其形相同趣を

り、

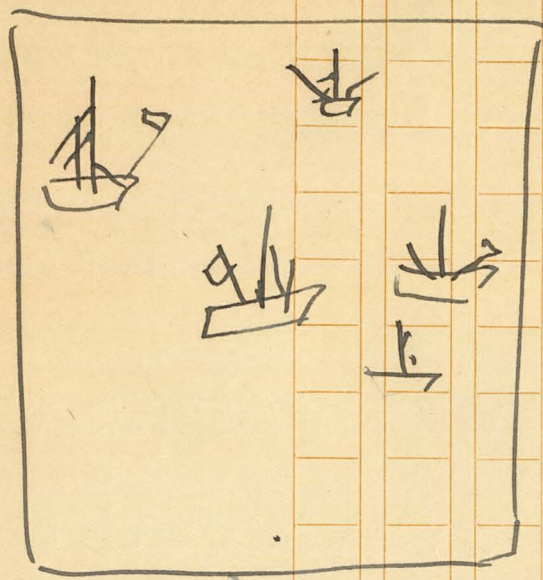
といて、その説明をいへる。

「海面に泊する所、数艘の異船

あり、其遠近及び各相距

を得、術を問ふものあり、

附圖してある。



ナシは二色

No. ...

DOTONBORI UTSUYAMA

(
in
Kien)

本草

李

何所 ~~比至~~ 比至

フロシヤ

10 × 20

つ、ちやう
砲一位に火薬二
百斤づつ備へて、
砲七百五十斤の火
薬我々万斤と向し
硝石一貫匁、硫黄
百匁、炭百五十匁
にて製したる火薬
あり。け火薬十カ
の内に合する硝石
と木炭の量も

「文明開化」に移された

これこそエロ・ガロ・ナンセンスではないか。

斯様に著者は到る処に、その異常なる才能

を閃めかす。この『算珠珍書』こそ、彼の柳

河春三の戯作であつた。^{（何だ）}（と、に時計に就いて

云々せる彼は、明治三年に『西洋時計便覧』

を著はしてゐる）。

（違ふ）

思ふに此珍書の出版は、明治二年の春であら

う。さうすれば、柳河は開成所の職員であつた。

彼の親友成島柳北は、「柳河先生略状」の中に

「先生筆硯の餘暇、時に短哇教曲を修り、

柳橋の妓流に興ふ。當時教坊中の之を誦ふ

もの頗る多かりき。

うしろ髪友、ひかる、方を眺むれば、

駒形あたり有明の、月が鳴いたと

思ひは、誰を待乳の杜鵑、

今一声の聞きたさん、またも乗り込む

山谷堀

……い

と述べてゐるが、『算珠珍書』は事實、アルコ

ホルの麝香で満ちてゐる。

「龍宮の乙姫誕生の祝いに、亀と狸々と正
 覚坊と酒を吞まするゝとありしに、杯の數
 を知らず、酒の斛數二十七石四斗なり。但し
 正覚坊は狸々より七石六斗多し、狸々は
 亀より五石七斗多しといふ。よりて吞
 みたる斛數を問ふ。

答 亀 二石八斗、 狸々 八石五斗、 正覚坊

十六石一斗。

一、而も當時の
南成の時代、
現代的といふは
高口大を教
その人々によ

著い

一つの社会現象であるとも、言はれらる。
この意味に於て、維新革命の際に、恐
らくは世界数学史上稀に見る所の、最もナン
センス味ある一数学書が、我国最初の西洋数
学書の著者によつて、戯作の小説とて對し
て、私は異常な感激に打たれざるを得ない

ものである。
註、柳河春三の付記に就ては、明治文化全集(新潮館)所載の尾佐竹猛氏執筆のもの。
又は「世大先覚」に著付し、無う照。
(一九三二・二・一八)

(大阪毎日新聞社発行)